



# 信州駅伝だより

信州駅伝サポート会  
会報 第4号

◆発行日 令和3年4月30日 ◆発行所 信州駅伝サポート会  
◆発行人 伊藤 利博 ◆編集人 町田 晓世・丸山 健志  
◆URL : <http://members.stvnet.home.ne.jp/shinsyu.ekiden.sapoto/>  
◆E-mail : Shinsyuu.ekiden.sapoto@gmail.com

## NPO法人信州駅伝サポート会 賛助会員の皆様への御礼



NPO法人  
信州駅伝サポート会  
理事長  
**伊藤 利博**

信州にも長かった冬も終わり、各種の花が咲き乱れる、春がやってまいりました。

賛助会員の皆様には、コロナ禍で大変な日常が続く中、お変わり無く、お元気で暖かな春をお迎えの事と思います。

日頃はN P O法人信州駅伝サポート会にご支援ご協力を賜り、誠にありがとうございます。今まで経験の無かった新型コロナウイルス感染症拡大の中で、皆様方には、信州駅伝サポート会に格別なるご理解、ご協力を賜り、ただただ感謝の気持ちで一杯です。

思い返せば昨年2月末頃から世界中が混乱に陥れられて、一年以上経った今でも、見通しが立たない状況下であり、不安が募るばかりです。こうした状況下の中で、皆様方には、変わらぬご支援を頂き、本当に嬉しく、ありがたく思っております。

長野県の陸上競技会も前半予定されていた競技会は中止されたが、後半は、無観客ながら実施する事が出来てほっとしました。本会が最も力を入れている都道府県対抗駅伝男女と、全国中学校駅伝が残念ながら中止になりましたが、他の駅伝はほぼ開催出来て、サポート会の皆様にも喜んでいただけたように思われます。

お陰様で、今年も関係するチームへ支援金を贈呈する事が出来て、本当に嬉しく思っております。これも偏にサポート会へご入会頂いた多くの賛助会員の熱き心と支援の賜物です。

本年はオリンピック・パラリンピック年となります、秋からの駅伝シーズンに向けて、これからも引き続きよろしくお願ひいたします。

## クラブチームへ強化費贈呈

理事長 伊藤 利博

今回、長野県内のジュニア層を対象にして「陸上競技倶楽部」を結成し、若い子供達の育成に励んで頂いている「川中島ジュニアランニングクラブ」、「腰越ジュニアクラブ」、「中澤ジュニアクラブ」に強化費を贈呈しました。

いずれも開設して、20年以上の年月が経過しておりますが、この間、長野県を代表する選手の育成に励んで頂いております。中学校では、駒ヶ根東、丸子、川中島中学校等で活躍しました。さらに中学を卒業した選手達は、佐久長聖、長野東高校等へ入学し、全国大会の活躍は素晴らしいものがありました。

現在も大学、実業団へ進んだ選手達は、日本のトップ選手として活躍し、都道府県対抗駅伝では、長野県チームの中心選手として活躍しており大変嬉しい思います。

小学生の子供時代に、陸上競技の面白さ、楽しさを教えて頂き、陸上競技人口増大に貢献されている、川中島の竹内万祐様、腰越の小山保高様、中澤の林 正俊様に心より感謝を申し上げます。これからも宜しくお願ひ致します。



川中島ジュニアランニングクラブへ贈呈 右より竹内コーチ、永原、浅川選手



**特別寄稿**  
**コロナ禍での**  
**箱根駅伝**

東海大学  
駅伝監督 両角 速



2区 名取 遼太 4年

「あの時」の4年生の不安な顔を、箱根駅伝が終わった今でも思い出すときがあります。現在も神奈川県は緊急事態宣言下にありますが、「あの時」以上に感染者数が多いにも関わらず、何故かわりと普通に活動をしている違和感を感じる、そのときです。

「あの時」とは、2020年4月に緊急事態宣言が発令されてクラブ活動休止が大学から言い渡された時と、7月末に出雲駅伝の中止が発表された時です。大学に箱根駅伝を目指して進学した4年生部員にとって最後の1年は、箱根駅伝に向けてこれまでの全てを懸けて闘う1年です。4年生になるまでに箱根駅伝に出場した者、最後の年に箱根駅伝出場の夢を叶えようとする者と様々ですが、その中で東海大学は前回準優勝、前々回優勝をしており、箱根駅伝は出場するだけではなく、優勝を現実的な目標としているチームです。マネージャーを含め13名の4年生が、「これからどうなるのだろうか…」という不安と戦わなければいけない、砂漠の中に独り放り出された様な「あの時」の顔を思い出します。

そして、もう一つの顔が本来はあるはずです、「新入部員の顔」です。それが今年はありません、入学とコロナのタイミングが重なり、多くの新入部員の顔を見ないまま、2020年度がシーズンインしました。希望に満ちた新入部員を受け入れるワクワク感も無く、逆に不安と心配事ばかりが頭を埋め尽くしていました。

監督である私も、箱根駅伝への想いは学生と一緒にです。とりわけ優勝を狙える戦力でしたので、そのチャンスを逃したくありません。感染状況に不安がありながらも「箱根駅伝は絶対に行われる」と自分に言い聞かせるように、部員にメッセージを送っていました。とにかく心がけたことは、寮に残った部員から絶対に感染者を出さないこと、そしてトレーニングを継続することです。しかし、チーム強化と感染防止は相反するものです、一方を強調すれば一方が疎かになる。その中で指導者として部員に示したことは、「部員の連携と協力なくして感染対策は成り立たない」「目に見えない感染症のリスクマネジメントをして、何事も個人の責任を果たす行動をする」つまり、全員で手洗いうがいとアルコール消毒の徹底、三密を避け、不要不急の外出をしない、と言う「当たり前のことを当たり前に実行する」ことが感染対策だと強く言い続けました。70名いる部員のうち寮に残ったのは20名です。そしてこのピンチを何とかチャンスに変えたい、そう意気込んでいました。出雲駅伝中止を聞いたのは、白樺湖での合宿中でした、この



7区 本間 敏大 3年

ような状況で合宿を行えたことは、受け入れ先の協力が不可欠です。何度もホテルとやりとりをして、感染予防策を練りガイドラインを作成して、大学に許可を得て、ようやく合宿が実現できました。当たり前の練習が当たり前に出来ない苦しみを味わって来た中で、練習の苦しみは部員にとっていつか喜びへと変化していたような気がします。合宿中の8月、第2波と言われる状況が起り、1ヶ月近くを菅平高原で過ごしました。幸い感染者もせず、費用もGOTOトラベルでなんとか持ちこたえました。多くの競技会が中止を決定する中で、箱根駅伝開催に対しても不安が募るばかりでした。特にロードレースは駅伝も含め次々と中止を決めたからです。そうした中で11月1日の「全日本大学駅伝」開催が最も勇気ある決断だったと感じます。全国規模であること、参加チーム数は箱根駅伝を上回るからです。とりわけ、愛知県、三重県は大会開催に危機感を感じる中で、その説得にあたった事務局のご苦労は相当なものだったのではないかでしょうか。この大会で東海大学は準優勝でした。前年は優勝をして連覇を狙いましたが、アンカーランに敗れました。お互いにコロナ禍であることは同じなので、連覇を逃したのはこの状況下を、チャンスに変えることは出来ませんでした。箱根駅伝は関東の大学駅伝です、山梨学院大を除けば参加チームは1都3県内で、参加チームは21チーム限定です、選手が全国から集まる大会ではありません。だからといって簡単に開催できるものではありません。コロナ禍で、何故箱根駅伝をやらなければならないのか。何故やれたのか。そして、何故感染者が出なかったのか。これは箱根駅伝に携わる全ての方の情熱が、感染予防対策に反映され、それを実行した結果です。箱根駅伝開催に向け、何度も予防ガイドラインが示され、その資料は膨大な量でした。これでも参加大学向けのマニュアルですので、ごく一部分です。そこには練習の集合の隊形や、寮生活の食事の座席位置まで示されており、選手の一日の活動を想定した全ての行動に対するマニュアルが示されたものです。これを目にしたとき、大会を支える側がこれだけの熱意を持って実行しようとする箱根駅伝を、絶対に開催して成功させなければならない、と思うと同時に、感染対策によりいっそう気が引き締まり、トレーニングも順調に消化できました。箱根駅伝で東海大学は5位でした。優勝を目標にしただけに残念な結果ですが、コロナ禍において学生の箱根駅伝を走る機会を失うこと無く、感染者を出すことが無く、大成功の大会でした。箱根駅伝に触れた全ての人が成功したとは感じてないかもしれません。否定的な方も居るでしょう。しかし、走らせて頂いた選手、それを支えた部員は皆様方に心から感謝をしています。その感謝の気持ちは、コロナ禍で行われた箱根駅伝という思い出と共に、年々深まる事でしょう。深まる感謝の中で、この恩返しをしていくことで箱根駅伝がより素晴らしい大会へと成長していくことと確信しています。

## 特別寄稿 川中島中学女子駅伝10連覇の軌跡

川中島中学駅伝コーチ 竹内万祐

10連覇(第22回大会平成23年~31回大会令和2年)を達成する事が出来ました。

これも関係する皆様方のご協力のお陰だと心より感謝申し上げます。実は、初優勝する以前に五人中三人が区間優勝(1区、2区、5区)を取ったのに、優勝出来なかった事がありました。これが私に駅伝の難しさを教えてくれた貴重な体験でした。あれがなかったら今の私はなかったと思っております。

思い起こせば、初優勝は41分台の大会新記録でした。三連覇は、アンカーの53秒差を大逆転でした。選手が最低限の5人だけの時もありましたが、本当に生徒達に助けられ、子供達の粘りと、勝とうと言う強い頑張りが思い出されます。

全国大会では、平成24年に長野県初めての5位入賞、26年には県初の準優勝に輝き、素晴らしい成績を収めてくれました。

男子も県で5回優勝し、全国大会でも、平成28年に5位入賞を果たす事が出来ました。

卒業生が高校、大学、実業団で活躍して夏休みに顔を出してくれる事も大変嬉しいと共に、励みになりました。

今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、全国大会が中止になり、全国大会10回目出場の表彰式も出来なくて残念でした。

昨年の全国大会の男子は、メダルを目指しておりましたので、非常に残念に思います。

最後に、川中島中学女子チームが、10連覇の偉業を達成できたのは、恵まれた練習環境がとても大きかったと思っています。練習場では、常に長野東高校の選手達を見て練習出来た事、地域で温かい応援してくださった方々、長野市陸協、信州駅伝サポート会、保護者の皆様、顧問の野澤重徳先生の応援があって達成する事が出来たと思っています。

まだまだ11連覇を目指して戦いが始まりますが、これからもよろしくお願いいたします。



## 川中島中学校男女優勝表敬訪問

理事長 伊藤 利博

長野県の中学校駅伝常勝チーム川中島中学校は、11月22日県大会において、女子は10連覇、男子は、5回目のアベック優勝の偉業を達成してくれました。早速お祝いに駆けつけました。

学校には、篠原謙治校長先生を始め、樋澤めぐみ教頭先生、顧問の野澤重典先生、竹内万祐コーチがお迎え頂き、男女チームに今後の更なる飛躍を願い支援金をお渡しました。

県大会を行う前から、全国大会は、実施しない事が分かっておりましたが、実際に優勝を果たした選手達には、大変きつい試練であったと思っております。特に男子チームは、記録的にも上位を狙える位置におりましたので、選手達の気持ちを思うと、いたたまれない気持ちになりました。女子チームは、全て二年生ですので、今年にかける期待も大きいものがあります。

コロナ禍の中で実施された県大会も、新型コロナウイルス感染

症対策を最重点に実施して開催されました。お力添えを頂いた長野県中学校体育連盟、長野陸上競技協会及び関係各位に、この紙上から重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。



左より竹内コーチ、野澤監督、篠原校長先生

# 全国高校駅伝 5位入賞



佐久長聖高校駅伝部  
監督  
**高見澤 勝**

昨年の12月20日に行われました第71回全国高校駅伝におきまして、おかげさまで5位入賞を果たすことができました。23年連続23回目の出場となった今回の全国高校駅伝でしたが、今回の入賞が本校としては20回目の入賞となりました。私が監督になってからは8年連続8回目の入賞ですが、前監督の両角速先生(現東海大学駅伝監督)の積み上げてきた偉大な成果があったからこそ、節目の入賞となりました。

レースは、1区は主将の伊藤大志(3年)が5位で中継し、2区尾雄己(2年)が区間賞の走りで順位を2位に上げ、3区越陽汰(3年)が留学生相手に粘りの走りで、3位でタスキを渡しました。圧巻だったのが4区吉岡大翔(1年)の走りで、1年生とは思えない堂々とした走りで区間賞を獲得し、2位で中継しました。その後、

怪我明けの5区古旗朝輝(3年)、全国大会初出場の6区植松孝太(3年)、怪我を抱えて走った7区長屋匡起(1年)と1つずつ順位を下げてしまいましたが、目標としていた5位でゴールしました。

しかし、多くの方々の期待はもっと上の順位だったと思います。その点におきましては、ご期待に応えられず申し訳ない気持ちでいっぱいです。もっと上を狙うチャンスはあったと思いますが、足りない部分があったからこそこの順位だったと思っておりますので、今回の反省を成長に結び付けて、次回の大会は更に上を目指します。

最後になりましたが、信州駅伝サポート会の皆様にはいつもご支援ご声援いただき、感謝しております。連続入賞ができるのも、信州駅伝サポート会の皆様のおかげです。この場をお借りし、お礼申し上げます。ありがとうございます。我々もさらなる高みを目指していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願ひいたします。



## 特別寄稿

**第94回  
箱根駅伝  
優勝を経験して**  
駒澤大学1年  
**鈴木 芽吹**

今年の箱根駅伝は、新型コロナウイルス感染症拡大により、世の中が大変な時期であるにもかかわらず関係者の方々のご尽力のお陰で開催していただき、出場させて頂いたことに感謝しています。その中で更にチームとしても総合優勝という最高の成績収めることが出来、とても嬉しく思います。これまで支えて頂いた皆様方のお陰だと思っております。

昨年は、春先から次々と大会等が中止となり、大学生活に慣れていかない自分にとっては、先の見えない不安でいっぱいでした。しかし、それは自分だけではなく、世の中の全ての人に言えることでもあり、チームとしても三大駅伝に勝つという目標を掲げてい

たので、それに向けて必死に練習を重ねてきました。三大駅伝の一つである出雲駅伝は中止になってしまいましたが、全日本大学駅伝は開催され、駒澤大学が優勝することが出来ました。これでチームに勢いが付き、箱根駅伝も絶対に勝つという強い気持ちを持てる様になりました。

箱根駅伝は、自分が小学生の時からの夢であり、5区を走ることが決まった時は、ワクワクの気持ちと緊張感が入り混じり、今までに味わったことのない感覚になりました。

個人的に、走りについては、区間4位で納得のいく走りではありませんでしたが、佐久長聖高校時代に、登り坂で練習を良く行っていたことを生かすことが出来て、最後までしっかりと走ることが出来ました。チームとしては厳しい状況の中でも練習を積み重ねて培って来た、諦めない心を最後まで貫いて総合優勝という結果を収められました。

今年は、三大駅伝三冠という目標を設定し、すでに始動しています。チームにしても、個人としても今年は、真価が問われる一年になると思います。駅伝は、タイムよりも勝ち切る強さが大切なので、その強さを身に付けられるように頑張ります。

これからも応援宜しくお願い致します。

# 初めての 采配を経験して



長野東高校陸上競技部

顧問

**横打 史雄**

4月、長野東高校陸上競技部の生徒たちと初めて対面した時、生徒たちは「全国8位入賞を目指します」と話をしてくれた。長野東高校は、全国高校駅伝において2年連続準優勝を含めた4回の入賞を誇り、前年の令和元年度は9位と入賞まであと一歩のところではあったが、まさに全国入賞の常連校となっていた。在校生にもうした伝統は引き継がれており、志とプライドを持った生徒たちの思いに何としても応えたいと覚悟したことを覚えている。ところが、新年度が始まってすぐの4月3日。新型コロナウィルスの感染拡大により、4~6月までの日本陸連が主催または後援する全競技会の中止または延期が発表されたのである。これにより、高体連はもちろん長野県の競技会もこの期間すべてが中止または延期となった。さらに4月10日には県立高校の臨時休校が通告され、結果的に5月末までその期間が続いた。そして、最大の衝撃だったのが、高校生スポーツの最高峰となる全国高校総体の中止の発表である。当時の社会情勢を考えれば、致し方ない判断だったと頭では理解しているが、それでも高校生たちの努力の成果を発揮できる場、そして高校時代にしか参加できない場がなくなっていくことに心が張り裂ける思いだった。

それからは、まさに葛藤の一年であった。様々な計画を立てた

り、アイディアを出したりしては実施断念という状況が繰り返され、その都度生徒たちは落胆してきた。指導者としての力不足が大きく、生徒たちには励ましの言葉をかけることが精一杯で、結果的に何もできなかった印象が強く残っている。

幸い本校の生徒たちは全国高校駅伝の出場の機会をいただいたが、現在も新型コロナウィルス感染症の影響は大きく、各種競技会、合宿、合同練習会などをまとめて計画することができない。長く続く厳しい環境の中で、生徒たちは前を向き、強くなろうと必死に努力している。そんな生徒たちの成長をどのように促していくのか、私の葛藤の日々は今も続いている。



2区を激走する五味叶花キャブテン

## 長野県選手の活躍



小林成美

日本学生ハーフマラソン選手権大会が、3月14日に開催され、女子は(名城大学2年)小林成美選手が優勝しました。

男子では、箱根駅伝で活躍した駒澤大学の鈴木芽吹選手が2位となり、8月中旬・成都で開催されるユニバーシアードの日本代表選手に選考されました。今年も、長野県の長距離界のエースとして、活躍を期待したいと思います。



萩谷 楓



和田有菜

第104回日本選手権クロスカントリーが2月27日福岡県で開催され、長野東高校出身の萩谷楓(エディオン)が東京オリンピック5000m代表田中希実選手を破って初優勝に輝きました。同じく東高校出身の和田有菜(名城大学3年)も3位に入賞しました。

## 特別寄稿

## 母校日本体育大学駅伝監督就任

スポーツを  
支える力日本体育大学  
駅伝監督 玉城 良二

この1年間で私たちスポーツ界の活動は新型コロナウィルス感染症の影響により大きな影響をうけました。それまで当たり前のように活動し、開催してきた競技会は次々と延期、中止を余儀なくされました。また、スポーツ選手が目標や夢の実現にむけて競技する姿を観戦する楽しみさえも激減してしまい、寂しさを感じました。そのような環境の中で、信州駅伝サポート会の皆様が地道に活動をされていることに敬意を表するとともに、感謝を申し上げます。

さて、長年大変なお世話になった長野県陸上界から、昨年の7月より母校である日本体育大学の男子駅伝監督に就任をさせていただきました。皆様にはお世話になったにもかかわらず十分な恩返しもできず大変申し訳なく思っていますが、母校からの要請という大変名誉なお声がけであり、苦しい決断をさせていただけま

ましことにご理解いただければ幸いです。

離れて改めて気付くことがおおくあります。その代表的なことが「支えていたいたいた」様々な事柄です。多くの方々や団体の皆様から活動を応援していただき、物心両面からご支援をいただきました。その代表的組織が信州駅伝サポート会だと思います。絶対的な強さを誇る長野県の男子駅伝チーム、着実に成長してきた女子駅伝チーム。立ち止まる機会をいただいた今だからこそ「スポーツを支える力」が何よりの要因であったと感じています。全国どの県にもない意志ある者が集まる組織は、その気持ちの結集あり、駅伝を愛する方々の絆です。「強さ・成長」は支える力が必ずあります。貴会の誕生と取り組みが「駅伝長野」を築いているかけがえのない「スポーツを支える力」です。

現在も駅伝により深く携わらせていただいていることに感謝をしています。新たな環境や大学、箱根駅伝と国民的関心の高い場での活動は不安や力不足を感じて日々ですが、支えていただいている方々が多くいることに感謝し、学生と共に一步一步成長していくべきだと思っています。

末筆になりますが、信州駅伝サポート会の益々の発展と、会員の皆様のご健勝を祈念申し上げます。

## 令和2年度 長野県駅伝 戦跡

## 11月1日 第71回高校駅伝男子(大町)

優勝 佐久長聖高校 2時間3分35秒(大会新) 2位 上伊那農業高校 2時間10分33秒 3位 長野日大高校 2時間12分25秒

## 11月1日 第35回高校駅伝女子(大町)

優勝 長野東高校 1時間12分02秒 2位 長野日大高校 1時間13分34秒 3位 伊那西高校 1時間15分41秒

## 1月22日 第31回県中学駅伝 (松本)

**男子優勝** 川中島中学校 56分31秒(大会新) 2位 赤穂中学校 57分18秒 3位 高森中学校 60分57秒

**女子優勝** 川中島中学校 44分38秒☆10連覇 2位 春富中学校 45分18秒 3位 駒ヶ根東中学校 45分35秒

## 12月20日 第71回全国高校駅伝男子(京都)

佐久長聖高校 5位 (伊藤・村尾・越・吉岡・古旗・植松・長尾) 2時間02分30秒 2区間賞-村尾 4区間賞-吉岡

## 12月20日 第35回全国高校駅伝女子(京都)

長野東高校 20位 (村岡・五味・仁科・佐藤・宮澤) 1時間11分02秒

## 瀬木 潔 様 (80歳) 令和3年2月3日

お悔やみ

瀬木様は、信濃毎日新聞社で要職を歴任し、信姫マラソン時代からお世話になり、長野マラソン立ち上げ時には取締役専務として創設に加わったメンバーの一員でした。私が信州駅伝サポート会を立ち上げたいと相談したところ、最初に賛成していましたが、ご支援を頂きました。まだまだ創設して間もない頃より、気軽に声を掛けて頂き、力になって頂きました。これからも頼りにしておりましたので、大変残念に思うと共に、大切な方を亡くしてしまった寂しく思います。どうぞ安らかにお眠りください。

## 石坂 克彦 様 (66歳) 令和3年2月15日

本会理事である石坂先生は、医師として、長野陸上競技協会の医事委員会を立ち上げて頂き、自ら委員長として就任し、長野陸協では貴重な存在としてご活躍されました。2018年から飯山日赤病院の院長として、地域の医療に携わってまいりました。長野マラソンでも、医者として、審判員として、沢山のアドバイスを頂きました。先生は、上田高校時代ハンマー投げで、全国大会2位の実績を残しました。まだまだお若くて、これからも何かとアドバイスを頂けると思っておりましたが、大変残念に思います。

合掌 心よりお悔やみ申し上げます。

合掌

編集後記

駅伝王国信州と呼ばれる所以は、多くの指導者が切磋琢磨して全国に通用する選手を育て続けた結果です。その中で指導21年にわたる川中島JRCの竹内先生は近年、男子の吉岡選手、女子の和田選手、小林選手等、多数の選手を日本陸上界へ送り出しています。小学生から中学まで、心身の発達段階での指導の大変さは計り知れません。長野県には数多の素晴らしい指導者が日々献身努力しています。指導者へのサポートも大切な時代です。

丸山 健志